

一人の生涯

林美美子著

一人の生涯その他
林芙美子



泣 蟲 小 僧	羽 柴 秀 吉	牛 肉	市 立 女 學 校	一 人 の 生 涯	人 生 の 河	權 花
四〇三	三六九	三七一	三四五	二四九	一六五	三

裝幀 佐野繁次郎

謹

花

今年は無業時代を現出するかも知れないといわれる洋子は、何となく重い気持ちになつていた。

働く事に不安を持つのではなく、働く場所が與えられそうにもないと云う事に洋子は不安を持つのである。——同級の祝水幸子は卒業も待たないで、姉と二人で、銀座裏にバーを始めていると云う風評が飛んで来た。學校でもかなり問題になつていると云う話だつたけれども、考えてみれば何も職業に貴賤はないはずである。何をしたつてその人の自由ではないかと思ひながらも、洋子は、心のうちで、自分の軀を賭けてもいいから、誰か音楽學校へやつてくれるパトロンのようなひとはないものだろうかと思つてゐる。いい匂いがするの、窓硝子を開けると、すぐ眼の下に白い水仙が群生していた。去年までは薯を植えていたところだつたのに、誰が、何時の間に、こんな花を植えたのかと、洋子は呆んやりと水仙の花を見ていた。もうじき春が来る。早く、こんな學校から解放されたい……。

「遠山さん！」

洋子が振り返ると、祝水が黄いろい毛糸のショールを首に巻いて、教室から出て來た。

「日向ぼっこ。」

「うん、水仙の花を見たのよ」

「風流でいらつしやいますわね」

「まア、意地悪ね」

「風流とみせかけて、實は、何かをたくらんでいると云うンでしょう……」

「たくらんでないわい。それよりも學校を出て、どうしていいかと思つて心配してたのよ。今年は就職も大變らしいつて、大野先生がおつしやつてたわ」

「大野先生つて云うのは少々神經衰弱なのよ。何たつて悲觀説ばかりでしょう。生徒をいしくさせて、内心苦を出してゐるつてえのが、大野兼子女史の戰術なんだわ。このごろ、大野先生、髪をお染めになつたんだつて……眞黒じゃない？ 氣味が悪い位だわ」

「まア、お染めになつたの？」

「まだ、髪をなさりたいんだわ。四十六ですつて、うちのママと同じなのよ。うちママの方がよつほど若いわ」

「でも、昔の人で、ほら、齋藤サネモリかしら、お爺さんに髪を染めたなつて……」

「でも、氣持が悪いじゃない？ 私は自然なのが好きよ。——でも、老人の事はどうでもいいわ。遠山さん、あなたの將來の理想はなあに？ 話してよ。私達にロマンチックな、何かいい事あるかしら……。鐵鎖のもとに呻く若き娘達つて云うのが私達ね。ミルトンの失樂園だわ」

「あら、だつて祝水さんはもういい事があるンじゃないの」「バーの事でしよう？」

「ええ」

「誰に聞いたの？ 世の中はすでにもう敵ばかりだわねえ。」

私には私の理由があるのよ。私、一度ゆつくり遠山さんにだけは、私が何故こんな性格になつたかつて事を聞いて貰いたいのよ。私は男つて憎いわ。憎くつてたまらないの。——今日もダボハゼの校長が、少し自重して下さいつて、私の肩に手をかけて云うのよ」

理科教室で送別の二部コオラスが聞こえている。祝水幸子はスカートのポケットから、ハクリイのガムを出して、一つを洋子の唇へ入れてやつた。

「ねえ、私、こんな狭い日本にいるのは厭だわ。何處か遠い外國へ行きたいわ。ねえ、私の顔、變なところない？」

「祝水さんは綺麗よ。背が高いし、ティラアドな服を着たらとても似合うわねえ。貴女は強いひとだから、きつと倅になる方ね……」

「まあ、倅？ ふふんだ……」

幸子は汚れた硝子戸にはアと息を吹きかけて、出鱈目に文字を書きながら肩をすくめて笑っている。

「倅なんて、私、望んでやしない。私、ほんとうは生きているの、退屈なの。でも、死にたいつて氣持ちは少しもないのよ。人生が退屈なの。ねえ、遠山さんに判るかしら……。私達の年齢つて、みんな、そんな氣持ちあるンじゃないかしら……」

洋子は窓から顔を出して、まるで化粧品の匂いのようなすがすがしい水仙の香に心をとめていた。

「ねえ、大人の世界つて厭よ、自分達の視線のなかにはいつて來たら最後、骨の髄まで批判して突き落してしまうのね、私がバーの手傳いをしていたつて、それがこの學校にどれだけの關係があるの？ 學校の信用がなくなるつていうのかしら？ 戰爭中は米英は敵だなんて教え込んでおいてさ、戰爭が済むと、みんなの先生も口をぬぐつて知らない顔してるンでしよう？ まるで喜劇よ。校長が追放になつたつて、ダボハゼが校長になるンだつたら、まだ、前の校長の方がよつぽどいい人だわ。ダボハゼなんて、教育よりも、學校プロオカみたいじゃないの？ そして、自重しなさいもないものだわ。私、よつぽどみんな本當の事を話してやろうかと思つたわ」

祝水幸子は、指でチュウインガムをすつと引きのばしながらこんな事を云つた。

「貴女、歸るンでしよう？」

「ええ、一緒に歸りましょうか……」

二人は教室へ外套や學校道具の鞆を取りにはいつた。校庭では時々、どおんどおんとフットボールのどどど音がしている。教室に残っている連中も、もうそれぞれに歸り仕度をしているところであつた。長身の祝水は荒々しく外套を引つかけると、唇にくちやくちやかんでいたガムのかたまりを、ぼいと窓ぎわの神西葉子の方へ投げつけた。ガムは葉子はむつとして祝水の方を睨んだ。祝水は視線をすばやくはずして「遠山さん」と、怒鳴っている。

「一寸、祝水さん！」

葉子が机から離れて後の方へやつて来た。

「私？ なあに？」

「貴女、私に何の恨みがおありになるの？ 随分變な事をするのね？ あんまり變な事をなさると、クラス會にかけて、皆さんに聞いて貰いたいわ」

洋子は困つた事になつたと思つた。祝水幸子はにやにや笑いながら神西葉子の前へ歩いて行つた。教室に残つているものたちの眼が、いつせいに祝水と神西の方をみつめた。

「クラス會でもなんでもかけたらいでしよう？ 人の事をあれこれと氣にして云いふらしりしないように、貴女こそ氣をつけるといいのよ。人の事はどうでもいい事なのよ。貴女のように秀才で、物事が幸福にゆくものだと、それを誰にでもあてはめて考える事は危険な事だわ。神西さんのようにね、無力な秀才型つて、獨裁主義できらいよ。私達の未來は長いンですもの……きつと、貴女だつていまに泣く時があると思うわ」

神西葉子は蒼い顔に眼鏡を光らせながら、何時までも黙つて、幸子の方を見ていた。幸子は自分で云いたいだけの事を云うと、果んやりしている洋子を誘つて、廊下へ出て行つた。

「祝水さん、大丈夫？」

「大丈夫よ。もう、私二度とあんなひとに逢う事はないでしょう……。私がバーに働いている事だの、友谷さんのお父さんを誘惑したのだつて、ある事ない事大野先生に告げ口して、

るンですもの……」

「祝水さんが、あんまり友谷さんを可愛がつて、目立つからだわ。みんなが氣にしている事なンですもの……」

「氣にしたつてかまわないわ。私、學校を出たら、一足飛びに大人になつてみせたいのよ。何でもやつてみるつもりだわ」

目白の驛まで二人は歩いた。もう、あと一週間あまりで學校を巣立つ二人にとつては、目の前にある社會の廣野が、何とも云えない不安な場所でもあるのだ。——祝水幸子は終職の一寸前に、母と姉の麗子とで、滿洲のスイフンガと云うところから引揚げて來ると、無試験で編入して貰える目白の鶴ヶ丘私立女學校へ入つた。幸子の母はスイフンガで藝者をしていたが、ここで或る少佐の世話になり姉の麗子を生んだ。

間もなくその軍人と縁が切れると、次にはやはりスイフンガへ轉任して來た若い大尉と戀におちて幸子を生んだ。大尉は幸子の生れたのも知らないで内地へ歸り、何時の間にか消息も絶えてしまつていた。幸子は折にふれては自分の生れたスイフンガの町が懐しかった。スイフンガと云うのは國境と云う意味だそうで、離段のようになつた町の中央にロシア風な寺院のあつたのなぞが時々幸子の夢にまで浮んで來た。青いペンキ塗りの木柵に圍まれた藝者屋の庭には、タイラックの花が咲いた。以前は白系露人のホテルであつたのを手入れして、赤練瓦の建物の入口に、松の家と書いた大きな提灯がぶらさげてあつた。幸子の母は老松と云う藝名で働いていた。日本髪の上からおこす頭巾をかぶり、黒い毛皮のシューズを着こみ、フェルトの長靴をはいて、三味線をかかえて宴席に

出て行く母の冬の姿を、幸子は時々なつかしく思い出すのだ。

「貴女のお母さん、氣さくな方ね」洋子に云われて、幸子は頬に皮肉な微笑を浮べながら、

「藝者したからでしょう。私の母さんが藝者だつて云いふらしたのも神西さんなのよ。私生子で、藝者の子で、バーで働く女學生つてろくなものじゃないでしょう。」

2

目白で山の手線のホームへ降りて行くと、幸子がいたすらそんな眼をして、

「ねえ、遠山さん、銀座へ行つてみない？ 私のバーを見學してよ。夕方までにお家へ歸ればいいンでしょう？ 私、ちゃんと送つて行くわ。ねえ、行つてみない？」と云つた。

「バーつて、どんなところ？ 怖いンでしょう？」

「怖くないわ。うちのものだけでやつてるンですもの。バラック建で、小さいとこだけど、呑氣にやつてるのよ」

洋子は誘われて、別に厭な氣持ちもしなかつた。歸つたところで、父はまだ會社から戻つてはいない。弟が學校から歸つている位で、森閑とした家の事を考えると、このまふつと眠やかなところへ行つてみたい氣もして来る。二人は省線で有楽町まで行つた。

さつきまで薄陽の射していた空あいが曇つていて、馬鹿に寒々しい風が吹き、流れる人通りに押されて日劇の方へ出た

時には、數寄屋橋のあつちこつちのビルに、ネオンサインが色めきたつて光つていた。洋子はもうじきこの荒々しい社會に立つて、自分は自分のコンパスで未來を測る日が来るのだと、心がうずくような氣がしていた。澤山の進駐軍の兵隊も、辻々の黄いろい木柵に凭れている。まるで異國にあるようなざわめきが巷にただようている。數寄屋橋を渡つて、Y新聞へ向う途中のカトリックの教會の横路地をはいつたところに、五六軒の小さいバラックが建つていた。

「そこところ、バーつて書いてあるでしょう？」

幸子に案内されて青ペンキの扉を押すと、薄暗い土間の椅子に、幸子の姉の麗子が腰をかけて化粧をしていた。

「ママは？」

「お風呂よ」

洋子は胸をどきどきさせながら、入口の扉に背中をつけて立つていた。

「あら、遠山さんじゃないの？ こつちへどうぞ……」

スタンドも板壁も青いペンキで塗らたてであるので、まるで、海の底にいるような感じだつた。

「幸ちゃん、さつき友合さんのお父さんがみえてね、鞆を置いていらつしたわ。大阪から歸りなんだつて……」

「ふうん……」

「ママと風呂へ行つたわ」

「洋子さん、火のそばへいらつしやいよ。お姉さん、私達おなかペコペコなんだけど、ザクスカつくつて頂戴」

幸子はそう云つて、スタンドの後にある棚の中へ頭をつつ

込んで食べ物をもそもそ探している。洋子はおずおずと臺の上に置いてある火鉢の前へ行つた。煉炭の穴から青い炎がぽつぽつと燃えたつていた。

「もう卒業ね。卒業なすつたら、どうなさるの？　洋子さんは御綺麗だから、すぐ御結婚なさるんじゃない？」

麗子が眉を描きながら云つた。洋子はこうした處で働く氣はしなかつた。もつと自分に似つかわしい職業があるような氣がした。だが、その似つかわしい職業と云うものは、何處に行き、誰に頼めば與えられるのかは一向に判らない。金さえあれば、宿望である音楽學校へ行けるのだけれども、父は、女が何時までも勉強をする必要はないと云う持論だつた。たかが歌うたいになる爲に、音楽學校へ行きたいなぞと云うのは、それは只女心の夢みたいなものであつて、まあ、學校を出たら、早くいい相手をみつめて、結婚して貰いたいと云うのが理想である。幸子が西洋皿に白いパンと、よせハムの刻んだのを盛りあわせて、卓子へ持つて來た。

「遠山さん、召し上れよ」

「ええ」

「案外いい店でしょ？　これ、みんな、ママの借金で出來た店なの……これからうんと荒かせぎなくちやア埋めあわせ出來ないんですつて……」

幸子はパンにハムを挟んでぱくりと頬ばつてゐる。スタンドの上には螢光燈がついてゐた。ネーブルがあげびの籠に山のように盛りあげてあるところへ、青い光線が沈んで、そこだけが馬鹿に清潔な眺めであつた。

「遠山さん御両親はいらつしやるの？」

麗子が、ガーゼで唇の紅を叩きながら訊いた。

「いいえ、母は早く亡くなりましたの」

「あら、じゃア、お父様だけ」

「ええ、弟と三人です」

「そりやアお淋しいわねえ——學校を不出になつたら、お勤め？　それとも上の學校にでもいらつしやるの？」

「いいえ」

麗子も立つて來て、パンとハムを爪の紅い指でつまんだ。

「ねえ、洋子さん、ここで働いてみない？」

思いついたように、指をなめながら幸子が云つた。麗子はふつと洋子を正面から眺めて、随分美しい少女だと思つた。細おもてで、難を云えば、何となく憂いをふくんでいる表情が氣にかかる。だけど、化粧のない顔は、咲き出たばかりの花のようにふく、いくとしている。麗子はこんな美少女にここで働いて貰ふ事はごめんだと思つた。自分の美しさと云うものを、あまり意に介してゐないところがある。

「こんなところで、働いて貰えやしない事よ。遠山さんほもつと理想が高くていらつしやる筈だわ。幸子ちゃん失禮よ」

「あら、そうかしら。だつて、遠山さんみたいな綺麗なひとが來てくれれば、ジャンジャン流行つちやうわ。でも、誘惑が大變かしら……」

ふわつと風を切つて扉が開いた。

「お歸んなさい」

麗子が甘つたれた聲で、にゅつと這入つて來た男に云つ

た。背の高い、紺の玉ラシャの外を着た男が、血色のいい顔色で火鉢のそばへ腰をかけた。

「こちら、友谷さんのお父さん、このひとは私のクラスの遠山洋子さん」

幸子が紹介した。友谷節子は一年生で、祝水幸子がベツトにしている下級生である。その父親がこんな若いひとだとは洋子には意外であつた。映畫でみる二枚目のようなすつきりしたところがある。風呂上りのせいとか、如何にも氣持ちよさそうに、スタンドの籠のネーブルを一つ取つて、がぶりと皮ごとかじりついた。

「友谷さん、まっすぐ歸らないの？」

「うん、まだいいよ。明日、大阪から戻る事になつてゐるんだから、今夜はママと麻雀をして、朝までには此間の雪辱戦をやるんだ」

洋子は呆れて、友谷氏の野性的な若々しいネーブルのかじり方を見ていた。

「遠山さんはお住居はどちら？」

ふつと友谷氏が尋ねた。何とも云えない美しい娘になどひそかに思つてゐる様子が、ぼちぼちとまばたきをする眼光の中に仄見える。

「中野です」

「友谷さんとこと近いのよ。住吉町ね」

「ええ」

「ほう……今日はわざわざ酒場見學ですか？ この姉妹は不良だから、あまり近寄らない方がいいですよ」

「まア、ひどいわア……」

幸子と麗子が友谷氏の両方の肩に手をかけてゆすぶつた。

友谷氏は兩の肩をゆすぶられたが、ネーブルを皮ごと綺麗に食べてしまつた。幸子はすつと裏の方へ這入つて行つたけれど、すぐまた水色ののれんから顔だけ出して、洋子を手まねきしている。洋子がのれんの中へそつと這入つて行くと、そこには三疊ばかりの疊敷きの部屋があつて、小さい炬燵がつくつてあつた。茶簞笥や、ラジオや、茶向臺がごちゃごちゃと並んでいる。窓がないせいか、こうこうとした裸電氣がついていて、幸子が兩手を泳がせて制服をぬいでいた。驚いた事には、制服の下にハクライ物の薄いピンクの絹のシュミーズを着ている。栗色の肩の肉が、何となく牝馬を思わせるように逞しかった。

「風邪ひくわ……」

「ううん、大丈夫。今日はゆつくりして行つていいでしょう？」

「でも、私、歸るわ。何もいつて來てないから、お父さん、心配するでしょう……これから、中野まで、一時間半かかつてよ」

「たまにはいいじゃないの。私、送つて行くわよ」

幸子は黒いスカートをはいて、炎えるように赤い毛糸のジャケツを棚の箱から引すり出した。

「これは五千圓よ。チップを貯めてやつと買ったの……洋子さん着てみない？」

洋子も、そんなの欲しいと思つていたので、一寸手をとる

しかけると、幸子は無理矢理に洋子の制服をぬがしにかか

た。
「駄目、そんな貧乏くさいものぬいじまいなさいよッ」

「厭よ。下着が哀れなンだもの」

「いいじゃないの……私、洋子さんの裸見たいのよ。制服ぬいでッ、私だつて裸になつてるじやないの……」

無理矢理に洋子は、幸子に制服をぬがされてしまった。玉葱をむいたように肩や腕が白い。なまめかしい肌の色にみとれて、幸子はつぎのあたつてゐる古びた毛のシュミーズもぬがしにかかつた。

「寒いわ」

「寒くなンかないわよ。そんなのぬいで、この絹のシュミーズ着てごらんなさいよ」

洋子は裸の肩をすぼめて、両の手で乳房の上をおさえて泣きそうな顔をしている。

幸子はかまわず洋子の腰へ手をかけて、もつさりしている毛のシュミーズをくるりと洋子の頭の上へまくりあげた。

「誰か来ると厭だわ」

「誰も来ないことよ。いいから、この絹を着なさいッてばッ」

厭がる洋子を裸にしてしまった。幸子は

「まア、遠山さんつてザイナスみたいね。癪だわ、こんな綺麗な軀して」

洋子は急いで、薄いピンクのシュミーズを着た。幸子は自分の黒いジャージのスカートもぬいで洋子にはかせると、洋

子は吐がすわつたのか、いそいそと眞赤なジャケツの袖へ手を通した。

「どう？ 素敵なスタンダードが出来たわね。赤と黒つて、洋子さんにとでも似合うわ……ほら、鏡を見て」

柱鏡の前に立つと、洋子の容色は、水を貰つた花のようにばあつと鮮かになつた。自分でも吃驚するほど美しい變りように、洋子はもう制服を再び着る勇氣はない。

幸子は幸子で棚のボール箱からグリーンの古びたスーツを出して着ている。

「このジャケツが五千圓よ」

「そう、案外安くゆずつて貰つたのよ。やつぱり制服よりいいでしょう？」

「いいわねえ。私こんなの欲しいわ」とても、こんなハイカラなもの、私なンかの手にははらないけど……」

「だから、早く働けばいいじゃないの。會社勤めなンかし、三千圓位のサラリーなンか取つたつて何一つ買えつこないわ。ねえ、世の中つてそんなものよ」

幸子は、洋子の背中を押すようにして店へ出て行つた。

「まア」

「綺麗でしょ？ 私が着るよりも遠山さんが着た方がよつほど似合うのよ。友谷さん、どうッ？」

麗子とひそひそ話しあつてゐた友谷氏も吃驚したように赤いジャケツの洋子を眺めた。近所に鰻屋でもあるのか香ばしい匂いが流れて來た。

「女つて、衣裳ですつり變るものだね」

洋子は制服をぬいだせいか、大膽な氣持ちになつて、麗子のそばへ腰をおろした。

「ママ遅いわね」

「年を取つた女性の化粧つてものは長いもンさ……」

「まあ憎らしい」

幸子は、服装が變つたせいかひどく大人びて見えた。灰色のズボンははいた長い脚を上手に組みあわせて、友谷氏の洋服のポケットから銀のシガレットケースを抜いて、チョコレートのような煙草を一本唇に啞えた。

3

「お父さん、お姉さんどうしたンだらうね？」

時計は九時をまわつている。源次郎は炬燵にあたつたまゝ、呆んやりと陶淵明集をひもといていた。さつきから、氣にして、自分も時々時計の針を透かして見ていた。

「お父さん、人は三才の中爲なりつて何の事なの？」

「三才の中爲なり？」

「そのお父さんの本に書いてあるよ、五十六頁かな……」

「ほう、お前にもこれが讀めるのかい？」

「讀めたつて、意味が判ンないや」

「ああ、これか、萬理自ら森著す。人は三才の中爲なりか、——これはねえ、天と人と大地を三才と云つて、丁度、人間が天地の中途にあるわけだらう……」

「ふうん……」

知二は學問と云うものはむつかしいものだと感じてい

る。源次郎はふつと思いついたように眼鏡をはずして、玄關まで行つてみた。

「僕、驛へ行つてみようか？」

「そうだなア、馬鹿に遅いなア……今日、洋子は何處かへ寄るような事を云つてたかい？」

「そんな事聞かないよ」

源次郎は少し不安になつて來た。下駄をつつかけて外へ出てみた。白いもやがたちこめていて、燒跡に急速に擴がつたバラックの町の灯が、まるでいきり火のようにあちらこちらでまたたいている。知二も出て來た。

「僕、迎えに行つてみようか？」

「うん、じやア寒くないようにして行つて貰うかねえ」

知二はくるくると毛糸の首巻をまいて、下駄をつつかけて、驛の方へ走つて行つた。源次郎は家の中へ這入つたが何となく落ちつかかなかつた。この數カ月、洋子の態度がどうも腑に落ちない氣持ちである。親の慾目から云つても、他家の娘よりは、洋子の方が美しいと思えたし、此頃、めつきり大人びて來たせいか、源次郎も何となく、以前のように氣輕には娘をあつつかえないものを感じていた。

男親だけの家庭と云うものは娘にとつては淋しいに違いないのだけれども、それかと云つて、いまだに急に、安子を貰うと云うわけにもゆかない氣持ちがした。洋子を誰かが貰つてくれさえすれば、すぐにも安子に來て貰いたいのだけれども、安子の肚のなかも源次郎には不安である。

源次郎はああのびをしなが、また炬燵の中に足を入れ

ると、思いついたように、洋子の卒業を待つて、今年中にでも、是が非でも結婚させてしまいたいと考えた。

それにかぎる。

多少なりとも、みえうるわしく生れついた娘なのだから、社會に放り出して働かせる事よりも、まず、知人に頼んで早く結婚させてしまおう方がいいのだ。昔は十五六から嫁にやつていたのだから、十九歳と云う年は、そんなに早いものでもあるまいと、源次郎は、あらゆる知人の誰彼れに思いを走らせて、會社の同輩である、植松四郎に相談してみようかと思つた。迎えに行つた知二が、洋子を連れて戻つて來たのは、十時をよほどまわつてからであつた。

「どうしたンだい？　いつたい……」

洋子は父から眼をそらすようにして、

「送別會で、お友達のところへ、仲のいい人達ばかりで、いまままで遊んでいたの……」

洋子は如何にもぐつたりした様子で炬燵へ膝を入れた。氣のせいかな洋子が坐つてから何となく酒臭い感じがするので、源次郎は妙な事だと、洋子の顔色をじいつと視つめた。外套の下から、眼の覺めるような紅い色がちらちらとのぞいてゐる。

「どうした？　疲れているね。お前酒でも飲んだンじゃないのか？」

「いいえ……」

「馬鹿に酒臭いなア」

「卵酒いだいたせいかしら……」

「卵酒位ならいいが、女が酒を飲むようなことをしちやアいけないね。お父さんの中學生時代でも、丁度、そんな事があつたが、酒を飲まされたり、煙草を吸つたりしてね。何でも一足飛びに大人の眞似をしたいもンだつた……」

洋子は黙つていた。坐つてみると、部屋の中がふわふわと浮きたつようにゆれてみえる。ぱつと眼を一點に集中しているのだけれども、きらきら光る眼がいまにも露をこぼしそうになまめかしい。

「何だ、その赤いジャケツはどうしたンだ？」

「祝水さんのを借りて來たの……」

洋子は外套の襟をかきよせるようにして胸をかくした。

「お父さま」

「何だ？」

「私、學校を出たら、祝水さんのところ手傳つていけないかしら？」

「祝水？　何の御商賣をしておられるンだ？」

「酒場なの、お母さんとお姉さんと三人でいらつしやるのよ。とてもお金になるンですつて……」

「金になるつたつて、お父さんは、そんな酒場なンか厭だな。女學校を出て、何も酒場勤めをする必要ないだろう……」

「ええ、でも、お金になるのよ、随分すじがいいンですつて。友谷さんつて、私の學校の下級生のお父さんも來ていらつして、東中野まで御一緒に送つて來て下すつたの……」

「お前、そこで酒を飲まされたンだろう？」

洋子は房々とした髪を後へかきあげながら、いたずらそう

に舌を出した。雑誌を見ていた知二が吃驚した様子で顔を擧げた。

「そりやアね、澤山の學生があつまっているのだから、いろいろの家庭の娘さんもいるだろうが、心安だてに酒場なんかに行くようじゃ困るな。お父さんはきらいだ。金だつて、そりやア、ないよりはしましたが、お前に酒場で働いて貰おうとは思わんねえ。——お前は、いま、一番女にとつて大切な年頃なんだから、いまのところは何も考えないで、お父さんに任せておきなさい。お母さんがいないんだから、自重して、いい娘になつて貰わなくちゃいけないねえ。自分は自分だ。どんな事をしたつて人間の生涯つてものはね、その人々にきまつた宿命と云うものを持つてゐるんだ」

「お前はね、正直な娘だ。自分の將來に對して、無關心じゃないけね。どんなに苦心さんたにしても、きちんと、自分の將來は築いてゆかなくちゃいけない。身をひくめて、投げやりになつては、大きな間違いをおこしてしまう……」

「ええ、でも……」

「酒場と云うところは、何も悪いところばかりとはきまつていないだろうが、私は、お前のその考えには、賛成しない」

「友谷さんのお父さまつて方、まだ若い方なんでしょう、何でも自由に自分のやりたい事をなさいつておつしやるのよ。どんだん自分の自由意思で、どんな職業を選んでもいいでしょうつて……」

「ふうん、それは、仲々危険な人物だね。何をしてる人なんだい？」

「機械屋さんなんですつて、モーターを専門につくつてる會社を持つていらつしやるんだつて……」

「その人が酒場に行つてたのかい？」

「だつて、祝水さんが、その方のお嬢さんを可愛がつてるんですもの……」

「ざつとうする驛のホームでも、省線の中でも、いつも洋子の肩を抱くようにしていてくれた事が、内氣な洋子には、何となく嬉しかつた。優しい紳士だと思つた。

「酒を飲んで云つたんだらう……」

「でも、いくら飲んでも酔わない方なのよ」

源次郎は焦々して來た。一人前になりかけようとして、背のびをしている娘に、妙な自由を吹つかける男の無責任に腹が立つて來た。

「お父さんは、そんなところへのこのこ出歩いて行くお前の考えを妙だと思ふね。いかんよ、いけないねえ……社會へ出てゆく最初の出發を、そんなところに向けるのはいけない。

——此頃、洋子は、ふわふわしているように思うが、どうなんでしょう？ 長い間、お父さんだつて、不自由な生活をして來たのも、お父さんは、お前や、知二へ、責任を感じるからなんだぜ……。何も、犠牲になつたとは云われないが、男親だけの家庭と云うものの不自由さを、今日まで耐えて來たのは判るだろう？」

お前を酒場勤めに出すつもりはない……」

實際、勤めを持つている男が、女中も置かず、子供二人をかかえて、學生の共同生活のような清潔な暮しをするると云う事に就いては、源次郎にとつても並々ならぬ苦勞がともな

つていたのである。一年前に妻を失つて以来、幾度か妻君を貰つてはと云う話もあつたが、源次郎は子供の眼をおそれて新しい妻を貰う氣もしなかつた。長い事わすらつていた妻の看病に來ていた女中の安子と、ふつとしたはずみで關係してしまひ、病人や子供の眼を怖れてひそかにあいびきをしていた事も、現在では、源次郎にとつては、自分と安子が一種の犠牲者になつたやうな氣がしなくてもないのである。

「お父さま、もういいのよ。私、祝水さんに斷りますわ」

「そのジャケツはくれたのかい？」

「ううんそうじゃないけど、着て行きなさいつて……」

「明日、お返ししなさい。お父さんが、何とかして買つてやる」

洋子は急に父が不機になつて炬燵へつつぶした。

洋子は仲々寝つけれなかつた。襖一重むこうでは、父と知二が軒をたてて眠つてゐる。洋子は母の鏡臺を電氣の下に引ずつてきて、寢卷の上から赤いジャケツに手を通してみた。ばあつと花咲いたやうな派手な色彩が頬に反射している。金色のボタンが光る。一つ一つボタンをはめて、胸をそらしてみよう。盛りあがつた乳房の上に手をやつて、鏡の中をじいつと視つめる。洋子は、鏡臺のひき出しを開けて、母のつかつていた、もう固くなつた極紅を探し出して唇に塗つた。受け唇のぼつてゐた唇が、急に鮮かに浮き立つて来る。眉すみを出して、短い眉を長く描いてみた。みずみずしい、しほれば露のしたたりやうな、果實のやうな色つぽさが、違ふ女

のように鏡に寫つてゐる。髪の手をくしやくしやと顔にかぶせてみる。ああと深い氣息が唇からもれた。洋子はふつと、踊り子になつてみようかとも思つた。歌をうたう踊り子になつて、マイクを抱きかかえるやうに惱ましい歌をうたう女優になつてみたい空想も湧いた。

みんなが美しいといつてくれる事が、洋子の胸にうずいて来るのだ。——友谷さんのお父さんがウィスキーを無理に飲まして下すつたけれども、あの酒はまるで魔法使ひのやうに怖ろしい。まだ酔いがのこつてゐるせいか、洋子は、皮膚の下がじんじんとしびれてゐた。

祝水さんはものわかりのいいお母さんやお姉さんと、あんな華かな商賣をして愉しそうだわと、洋子は、男のひとばかり相手の、あつた場所に何とない興味を持つた。でも、さつき、父の云つた、投げやりな氣持ちになつてはいけないと云つた言葉も、胸の中にひつかかつてゐる。東中野の驛で友谷さんのお父さんと別れる時、「じゃアまたお眼にかかりましょう。節子のところへも遊びに來て下さい」と云つて、固く握手された時に、脚のさきまでしびれるやうな氣がしたのは、あれは何なのだろう。

洋子はジャケツをぬいだ。寢卷もぬいだ。幸子に借りたデシンのピンクのシュミーズ一つになる。肩の肉がすべすべしている。兩の乳房の上をふちどる細い灰色のレースが泡立っているやうだ。どうして、女には、こつた大きい乳房があるのだろう。柔い絹地の上からぐつと強く大きい乳房を押してみる。腰のあたりが重くなるやうなシゲキがある。悲しく